talk! talk! talk! ミュージシャン・坂本美雨さん

ミュージシャン

坂本美雨さん

“坂本龍一 featuring Sister M”としてその正体を明かさずにデビュー。透き通るような歌声に多くのファンを惹きつけ話題を呼んだ。以後、ミュージシャン・坂本美雨として活動を始め、歌だけでなく、写真・文章、アクセサリープロデュースなど様々な形で自らの世界観を表現している。
今回は表現方法のひとつだという写真についての話を交えながら、才能溢れる美雨さんの魅力をたっぷりとお伝えします。

プロフィール

さかもと・みう。1980年生まれ。世界的なアーティスト坂本龍一氏、ミュージシャンの矢野顕子さんの娘として生まれ、幼少時代を東京で過ごす。1990年4月、9歳の時に両親が音楽活動の拠点をニューヨークに移した事をきっかけに家族で移り住み、10代をニューヨークの郊外で緑に囲まれて過ごす。
1997年1月、坂本龍一氏のプロジェクト「Ryuichi Sakamoto featuring Sister M」に“Sister M”として参加し、「The Other Side of Love」を歌う。1999年、映画「鉄道員（ぽっぽや）」の主題歌「鉄道員（TETSUDOIN）」をリリース。同年6月、現地の高校を卒業。9月、フルアルバム「Dawn Pink」をリリースし、本格的に音楽活動を開始する。現在も、日本とニューヨークを行き来しながら活動を続けている。
活動の幅は音楽だけにとどまらず、雑誌の連載などで写真や文章を発表したり、ラジオなどのパーソナリティとしても活躍。また、自らデザイン・製作するアクセサリー「aquadrops」を発表、販売したり、今年9月には美雨さんが散文詩を書き、イラストレーターの山口由起子さんが絵を描いた詩画集「aqua（アクア）」を発売するなどマルチに才能を広げている。

自分にとって歌うことは いちばん自然な表現方法

歌手になろうと思ったのはいつ頃ですか？

“Sister M”として歌ってからですね。

それまでは別の夢があったのですか？

夢というほどではないんですけど、自然に音楽には関わるだろうと思っていました。音そのものを作る人になりたいとも思ったし、ＣＤジャケットにも興味があって、ほんの少し、グラフィックの勉強をしていました。両親と一緒に仕事をしているクリエイターを見ていましたから、自分が音楽に携わる方法として、すごくイメージしやすかったんでしょうね。

“Sister M”として歌った時は、ご両親がミュージシャンということで、プレッシャーや気負いはありませんでしたか？

いえ、まったくなかったです。そもそも、“Sister M”の時は、状況を自分ではあまりよくわかっていなかったんです。この曲がシングルとして発表されるとかドラマの主題歌になるとか誰も言ってくれなくて、「試しに歌ってみる？」っていうような感じだったので、まったく何の気負いもなかったですね。それにしてはレコーディングの時、人がいっぱいいるなぁって思いましたけど（笑）。

でも、その曲をきっかけに歌を歌っていこうと思うようになったんですよね？

それまでは別に「私っていい声」なんて思ったことはなくて……。それが、実際に自分の声が音楽になり社会に流れて、いろいろな人に「いいね」って言ってもらえてから、価値観が変わったというか、選択肢が増えた気がしたんです。今まで「歌手になる」っていう選択肢を閉ざしていたのに、それがいきなり広がった。“Sister M”をやってみて、自分にとっていちばん自然な表現方法がやっと見つかったと思いました。

気負うことなく、自然な形で今の仕事を選ばれたんですね。

そうですね。“Sister M”の時はまだ高校生だったので、始めは休みのたびに東京に来て仕事をしていました。卒業してからだんだんと東京に来る期間が長くなってきて今に至る、という感じですね。

写真を撮ることで 「記憶にとどめたい、残しておきたい」

写真を撮るようになったのはいつ頃からですか？

撮るようになった時期やきっかけは、まったく意識の中にないですね……たぶんフィルムコンパクトカメラを持ち歩くようになったのが始めだと思うんですが、覚えていないです。今はいつも持ち歩いて、月並みですけど、空を撮ったりしています。この空模様は今撮らないと二度と出会えないんだって思って。

撮っておかないと、と思う？

自分の記憶にとどめておきたい、残しておきたいっていう思いがすごく強いですね。そしてその風景を誰かに伝えたい。

数多くある空の写真は日記のように撮影しているとか。「これは東京の空でしょうか……」

美雨さんのオフィシャルホームページにお気に入りのものなどを撮って掲載されていますね。

そうですね。自分が綺麗だなぁって思ったものや、気になったものを分けてあげたいという感じだと思います。

写真以外にも、歌はもちろん、詩や文章など様々な形で表現活動をされていますね。

そうですね。でも私にとっては歌も文章も写真も違いはなくて、すべて同じところにあるんですよ。形にして残しておきたい、それを見せたい、そう思ってやっていたら、たまたま違う表現方法になっていただけなんです。ただ、そのとき表現したいことがいちばんうまく伝わるような表現方法を、自分で無意識のうちに選択しているんだろうなぁとは思いますね。

「坂本家の姫、タビちゃん。
窓際が特等席。
毛繕いを連写したうちの一枚です」

写真を撮る側と撮られる側の エネルギーの交換

好きな写真家はいますか？

たくさんいますよ。森山大道さんや紀里谷和明さん、川内倫子さんも好きですね。彼女の写真は空でも花火でも、ドロドロとしたような生々しさが現れている感じがして、恐ろしいけれど惹き込まれてしまいます。でも、見ていて好きなのと、撮ってもらうのが好きっていうのは全然違うんですよね。

撮られていて好きというのはどのような方ですか？

撮ってもらうというと、アラーキーや篠山紀信さん、紀里谷さんもとても素晴らしいですね。あと、HIROMIXは女の子なのでまたちょっと感覚が違いますし、蛭川実花ちゃんは撮られていて楽しいですね。彼女も私も〝乙女〟だから、純粋に楽しい！

乙女？

〝女の子らしさ〟っていう部分ですね。彼女もそうだから、私も〝乙女〟な部分がどんどん引き出されるんですよ。撮られていて楽しいし自然でいられるし、いっぱい笑えるんです。だから彼女の撮る女の子はほんとうにみんなかわいいんですよ！

お互いの波長がピッタリと合って撮影ができるんでしょうね。

そうですね。でも、実花ちゃんに限らず、写真家のみなさんってエネルギーがすごいんです。そうするとこっちも負けちゃいけないと思うんですけど、でも意気込み過ぎてバリアを張ってしまうとダメなんです。中身をさらけだして、エネルギーの交換をしているような……とにかくすごいですよ。

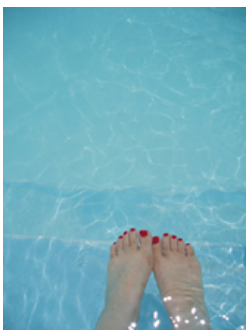
一筋縄ではいかない感じですね。

そうなんです。バリアを張らずに生の自分でいることって、ものすごく難しいんですよ。バリアを張るとすぐに見つかってしまう。それが一瞬で相手にわかってしまうから恐ろしくて。レンズを通して「お前、何カッコつけてんだよ」って。でも、自分の中身を見透かされるというのも、これまた人生で一番恥ずかしいような思いなんですけどね。

美雨さんも撮っている相手の気持ちが見えることがあるんですか？

私に相手のことが見える？　いえ、まだそこまで気が回らないですね。でも、相手と通じ合う瞬間というのはわかります。「あ、今だ！」っていう瞬間。それはもうお互いに一瞬でわかるものなんです。何百枚撮ったうちの1枚か2枚だったりするんですけどね。

写真を撮った場所にいたことが その人の才能の一部



「強烈なロサンゼルスの陽射しの中、
足をプールに浸し、
ほてった身体を冷ます」

いつも思っていることなんですけど、写真はカメラという機械を使って写すから誰でも撮れるんですよね。だから歌手の方が撮ったり画家の方が撮ったり、いろいろな人が撮ってどこかに発表したりしている。それは写真の技術だけではなくて、写真を撮った場所に「行った」という行動力だったり、そこにそのとき「いた」という偶然や運命にその写真の素晴らしさの半分があるんじゃないかと思うんです。

その写真はそのとき、その場所にいなければ撮れなかった、ということですか？

そう、その上で構図やテクニックや、その人の持ってる波長などの要素があるわけで……私は出会ったその場所、景色に撮らされている気がします。

撮らされている？

たとえば東京の空を同じカメラで同じ時間帯に撮った人ってたくさんいると思うんです。だけど、「今日、この時間にこの場所で、この角度から東京の空の写真を撮った」ということ、そしてそれを

「切り取った」ということが私の才能であり、自分を表現するということなんじゃないかと思います。

なるほど。

だから、そのためにいつもアンテナを張っていないといけないと思います。人を撮る場合は、相手の感情や表情を引き出すことがそれにあたると思います。その表情が撮れたのは、今その表情を引き出した自分しかいないっていう。

引き出される感覚というのは撮られる側にもわかるのですか？

わかりますね。やっぱり、撮る人の人間性がこっちにも影響してくるんです。だからいつもと違う表情になれる。人間性というと努力ではどうにもならない部分かもしれませんが、それも才能の一部ですよね。

オリジナリティというのはそういった所に出るのかもしれませんね。

自分でも、こんな写真誰にでも撮れる、似たような写真は山ほどあるって一時期は思っていました。でも、これを撮ったのは私なんだから、そのことだけで素晴らしいんだって思うようになったんです。私のオリジナルというのはそれしかないなって。もちろん、何年も写真を勉強して突きつめてきた人には技術や歴史があって、「そういうレベルの問題じゃないんだよ」って言うかもしれませんが、素人としては、そう思っています。

「ニューヨークの大停電の夜。唯一の光を求めて、
ハドソン河沿いにわらわらと集まってくる人達……。
ピースな場所でした」

「自分は世界に生かされている」 その思いをわかり合いたい

歌、そして写真や文章を通して美雨さんが表現していきたいこととは何ですか？

世界は美しいということ、それから自分は小さくて、世界に生かされているんだなぁっていうことですね。

世界に生かされている？

アガペー（※注）です。自分ではなく、相手を思う。自分ひとりじゃ生きられないですから、その気持ちがなければ何もできなくなってしまいます。今日はこんなにおいしいものを食べられて、こんなにかわいいものに出会って、それはみんな自分ひとりではできないことです。世界に生かされているんです。

その気持ちを多くの人に伝えてゆきたいと思って活動を続けているんですね。

伝えたい……というよりも、自分を使って伝えられるんだったらそれに用いられたいという感覚ですね。誰でも持っている気持ちだと思うので、お互いにそれをわかり合えたら、通じ合えたらいいなと思います。でも、発信する側というか、影響を与える側というのはすごく責任が重いんですよね。いい加減なことは言えないし、でも考え過ぎると何もできなくなってしまうから、自分の中で闘いつつやっています。

これからチャレンジしていきたいことはありますか？

なんだろう？　……ライブを早くやりたいですね。まだまだ自分が楽しむことでいっぱいいっぱいですけどね（笑）。あとはこれからも歌だけでなく、写真も、詩も、散漫にならないように、でも全部手を抜かずにちゃんとやっていきたいです。

では最後に、写真の話に戻りますが、これから撮ってゆきたいもの、撮りたいものを教えてください。

2年前、ロシアを旅してたくさんの写真を撮ったんですが、思うように撮れなくて。私の感じたロシアの温かみが出ていなかったんです。だから、今度は、ロシアに限らずどこか知らない土地に行って、そこに住む人の「個人」をとらえたような写真が撮りたいです。私は人を撮ることにはあまり興味がないんです。それよりも、その土地の生活や人の存在が残っているような物や場所から、温かみがにじみ出るような写真が撮ってみたいです。

では、それをより表現しやすいように、ちょっと勉強して技術アップをしたり、カメラやレンズに凝ってみるのも面白いかもしれませんよ。

そうですね。これからはそういうふうに広げていきたいと思います。

※　注　アガペー＝代償を求める打算的な愛ではなく、見返りを求めない、他者中心、自己犠牲的な性格の愛のこと。

コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社ニコン 映像事業部
株式会社ニコン イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.